

失望と背中合わせのご縁と強運

中野香織

肩書きはひとつだけ、というのが本来はカッコいいのですが、許される場合にのみ、「エッセイスト 明治大学特任教授」とふたつ並べて紹介していただくことがあります。

ごく当然のことながら、パーティーなどでは初対面の方から「どんなことをお書きになるのですか?」とか「何を教えていらっしゃるのですか?」と尋ねられます。社交上の会話なので、あっさり「ファッションです。ファッションをめぐる文化やら歴史やらを」と答えます。すると、ほとんどの場合、上から下までまじまじと眺められ、その後、「どうりで、おしゃれでいらっしゃいますねえ」と社交辞令が続きます。さらに「お好きなブランドはどこですか?」といったお決まりの質問が投げかけられます。これが社交というものであり、世間の多くの人がファッションという言葉から連想するのはそうした表層的なおしゃれに関する話であることも了解しているので、その場は楽しくおしゃべりをするのですが、一人になったときに、不思議に思うことがあります。なんでこんな仕事をしているのか、と。

特別ファッションが好きというわけではありません。今の仕事は目指して手に入れたというわけでもありません。富山中部高校時代は、いまはなき理数科というクラスに所属していて、雨の日も風の日も自転車で呉羽山を越え神通川を渡り、三年間心ゆくまで勉強させていただきました。その頃は医師になりたかったのです。読売新聞の作文コンテストに入賞した時、地方紙に取材され、写真入りで「将来は女医さん」という、今から考えると恥ずかしくない見出しつきで紹介されたことすらあります。

それが叶わず、ぼんやりしていた大学二年の時に旅行雑誌でライター募集広告を見つけ、「スペースイン語ができること」という条件をほとんど無視して応募したら「その度胸を買う」と採用され、

結局、ライターの仕事が途切れず続いていききました。

そんなアルバイトに夢中なものだから大学の内部進学でも第一希望は叶わず、巡り巡って遠回りしたあげく、ご縁があったのは、「イギリス」を専門とする学科でした。その大学院で十九世紀イギリスのダンディズムとジェントルマンシップ、それを体現するスーツについて修士論文を書いたところ、「画期的な論文のつもりだったのですが多くの教授から「ファッションはアカデミズムにそぐわない」と失笑され、一方、そんなテーマでの書き手を求めていたメンズファッション誌から次々に仕事が来るようになりました。

後者の需要に応えるような形でメンズファッション誌において書きためた連載を「スーツの神話」という文春新書にまとめたところ、読んで日本経済新聞の記者がファッション現象一般について連載記事を書かないかと話をもちかけてくれました。ファッションなんてわからないけど依頼は受けるしかないという覚悟を決めて、毎週、独学で必死に勉強してワンテーマを書くというのを七年間、続けました。その結果、「モードの方程式」という連載と同タイトルの本を含め、三冊の単行本プラス一冊の文庫が生まれました。

その頃、明治大学がクールジャパンを掲げた新しい学部を立ち上げ、ファッション文化を教える特任教授として来ないかとお誘いいただきました。専門テーマでの著書が三冊あったことで無事に審査をとり、もはや「アカデミズムにファッションはそぐわない」という時代ではなくなっていたことを実感します。二〇〇八年のことです。以後、「ファッションとは、時代と人を形作るもの」と定義して、ファッションを通して人や時代や社会を考える、という研究をメインに据えながら、十九歳からの仕事の延長においては、学問上の研究成果をエンターテイメントとして書いたり話したりしている次第です。

つまり、私は進路が決まるターニングポイントにおいて、自分が意図したり望んだりした結果を手に入れることができたことはほとんどなかったのです。だから不本意に終わったかといえそうですが、なく、「圏外」からの救いの手に付き従った結果、思いもよらなかった幸運に恵まれて、まったく想定外だった仕事に就いているわけです。

「望み通りの人生を送る」「夢をかなえる」「計画どおりの人生を手に入れる」、それが実現出来た人はたしかに最高だと思えます。しかし、叶わぬこともある。私の場合、叶わなかったことが多すぎました。ただ、叶わぬと悟った次の瞬間に、とりあえず目の前にある別の「ご縁」に感謝して、そちらに一二〇%のエネルギーを注ぐことに集中してきました。不安や絶望を解消する唯一の方法は「没頭」だということを高校時代に学んでいたことが大きかったかもしれません。その結果、時折、絶妙なタイミングでおそろしいほどの強運に恵まれました。これは二〇%サービスに対する天からのお返しだと思っています。

「思い通り」ではなかったけれど、我執を捨てたら、導きとしか思えない縁に恵まれて今の仕事をすることになりました。十年後、どこに導かれるかわかりませんが、失望と縁と運の不思議な関係に感謝しながら、日々、目の前の仕事に没頭していければ幸せです。

(なかの・かおり)

